

Guiding Question

本講では、近世中国における漢族（やその下部単位）にかんする言説（伝説）をとりあげ、その伝説内容と史実とを比較しながら、その伝説が作られた目的を考え、さらにその伝説に対する理解が近代にどのように変化したかを検討します。そこで、中国でも、また日本（神武天皇東征神話など）でも、あるいは他の国や地域でもかまいませんので、ある民族（やその下部単位）にかんする前近代の言説について、いつ、何のために作られたかを考えてみましょう。また近代の言説は、前近代の言説と無関係に作られているのか、それとも前近代の言説を下敷きにして作られているのかも考えてみましょう。

討論では、主に以下の意見が提起された。

- 1 黄帝・炎帝の神話。神話の中身は勝った方が正義で、負けた方が悪者というストーリーで作られている。同じ名前的人物（ないし神）は、違った場所、違った時代で違ったキャラとして複数回出てきくこともある（例えば蚩尤）。神話は必ずしも事実ではなく、後付けで筋が通るように創作が入っている。
- 2 支配の正統性を主張するために、皇帝が伝説を作り上げるという事例はたくさんあるが、私たちの出身地である上海や天津は何百年前に作られた新しい街で、しかも漢族中心の街で、自分のアイデンティティを強調するような伝説を作る必要はあまりない。無錫（梅村）では、「泰伯」（周太王の長男）という人物にかかわる伝説が存在している。賢明の人として地元の人に尊敬され、泰伯廟も作られ、祭りやイベントなどもある。
- 3 A 広東省韶光の伝説。自分の先祖は唐の時代に（安史の乱のため）中原から逃げてきた客家人であるという言説。事実であるかは分からないが、差別化されないように作られた言説かもしれない。
B 山西洪洞大槐樹移民の伝説。足の小指の爪が二つ分かれている人は洪洞大槐樹から来た移民だという明代の伝説である。移民の途中で人々が逃亡するのを防止するため、役人は刀で人々の足の小指の爪を切り、その証としたそう。西王母はそういった人たちに同情を寄せた説もある。
- 4 「炎黄子孫」の伝説。黄帝炎帝は黄河文明における中国固有のものとして知られているが、テキストにある「漢族西方起源説」が存在していることを考えれば、前近代と近代の言説は関係があり、西方に劣らないことを証明する「西方起源説」のように、結局伝説は政治のために利用されている。

担当教員の総括：

討論にも出てきたように、上海や天津のような街は、周囲に非漢族の人たちがおらず、漢族と非漢族ということを考えるきっかけが非常に少なく、あるいは意識する必要がない。本講で紹介した広東や福建では、非漢族の人々が周囲におり、漢族と非漢族ということや自分のアイデンティティを意識しなければならない。漢族と非漢族とが接触したりすると、アイデンティティについて、また政治や経済利害の面についてもそれを意識しなければならなくなる。山西省の移住伝説はよく知られているが、（同じ漢族地域への移住伝説が）なぜ作られたか、その意味付けはまだ分からない。研究するにはまだ新し材料が必要である。客家人も潮州人の移住伝説も同じように、非常に有名な伝説ではあるが、客観的な資料がまだ不十分である。また、「漢族西方起源説」は留学生にはあまり馴染みのない説かもしれないが、100年前では、梁啓超や康有為や孫文など、変法派と革命派両方もこの伝説を取り入れた。黄帝についていえば、伝説が作られた後、2000年間ぐらいほとんど登場する機会がなく、再び登場したのが100年前であった。20世紀初め、漢族全体を統合し、結束させるために象徴としての黄帝を再登場させたのである。日本の幕末に、統合するための象徴として江戸時代後半まで存在価値があまりなかった天皇を持ち出す事例と類似性がある。